北京市における観光農園の展開と成立要件

藤　目　節　夫（愛媛大学地域創成研究センター）
楊　　洋（フジトラベルサービス）

Ⅰ　はじめに

近年，アグリツーリズムというタームに端的に表現されるように，農業や農村に対して単なる農産物の提供以上の役割を求める傾向が顕著になってきた。第1次産業としての農業（アグリ）の特性を活かして，第3次産業としての観光（ツーリズム）を中山間地域に育成しようとする動きである。農産物の提供以上の役割を農業・農村に求めた最初の動きは観光農園であった。わが国においては，1965年頃から観光農園業が盛んに行われるようになったが，それは高度経済成長と軌を一にするものであった。高度経済成長により国民の所得は増加したが，逆に急激な都市化にともない自然にふれあう機会が減少し，人々はこの喪失機会の補填を観光農園に求めたのである。都市住民に比較して，高度経済成長の恩恵にあまり浴していない農業者にとっても，観光農園は都市・農村間の所得格差解消には有効な施策であった。

このように，観光農園は第1次産業の農業に第3次産業的な新たな要素を付加した点で注目すべき展開であるが，その地理学的研究は他の農業地理学的研究に比較して極めて少ない。管見する限り，観光農園に関する最初の地理学的研究は田辺（1988）であろう。彼は，先ず兵庫県の観光農園の分布，開園年度，利用作物を概観した後，同県春日町の観光農園を取り上げその発足過程や現況，さらには現在の問題点などを明らかにした。溝尾（1994）は観光に関する著書の中で観光農園に言及し，観光農園が成立する可能性がある地域として3種類を指摘した。本研究との関係があるのでそれらを列挙すると，①大都市圏あるいは中核都市からの日帰り圏，②宿泊観光地の近接地，③観光ルート上，の3つである。河原（1996）は，京都府における観光農園の地域性を明らかにした後，八幡市における観光梨園を取り上げ，急激な住宅開発に伴い住宅地に隣接するようになった観光梨園の抱える問題点などを明らかにした。小池（2002）は，茨城県千代田町の観光農園を取り上げ，その成立過程や地域特性を明らかにし，さらには観光客の形態と観光行動を把握して，観光農園の維持活動について論考した。この他に南房総千倉町の花つみ園の実態を明らかにした山村（1993）の研究もある。

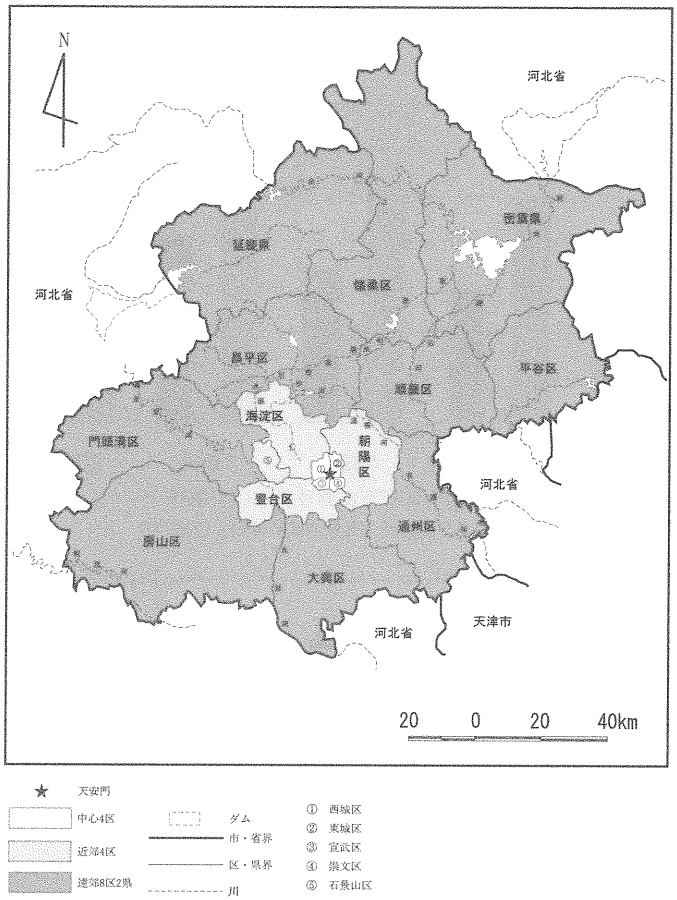
さて，本研究の対象地域である中国における観光農園の研究は，観光農園の出現が比較的近年の現象でもあり極めて少ない。管見する限り，わずかに盧云亭（1995）と郭煥成（2002）の著書があるのみである。前者は，国内外の観光農業の研究を整理し，観光農業の定義，特徴，成立要件などに言及したものである。後者は，北京市における観光農業の発展に，北京市当局の観光農業の重要性の認識，それに伴う各種の補助政策が大きな役割を果たしたことなどを明らかにしたものである。

これらの研究は，中国における観光農園研究の先鞭をつけるものとして評価はできるが，観光農園を全体として捉えており，個別の観光農園の実態が明らかにされていないなどの不充分な点も多く，今後に残された課題も多い。そこで本研究では，中国の中でも最も観光農園が発達している北京市を取り上げ，先ず観光農園の対象作物である果樹栽培農業の発展を概観し，次に観光農園の展開と空間的分布特性を明らかにし，さらには北京市における観光農園の成立要件を論考する。そして，北京市に立地する観光農園に対するアンケート調査から種々の特性を考察し，最後に性質が異なる2つの観光農園を取り上げ，現地での詳細な調査よりその特性や地域へのインパクトなどを明らかにする。これが本研究の主要な目的である。

Ⅱ　北京市の概要と果樹栽培の発展

1．北京市の概要

北京市は，中華人民共和国の首都であり，天津市と



第１図　研究対象地域

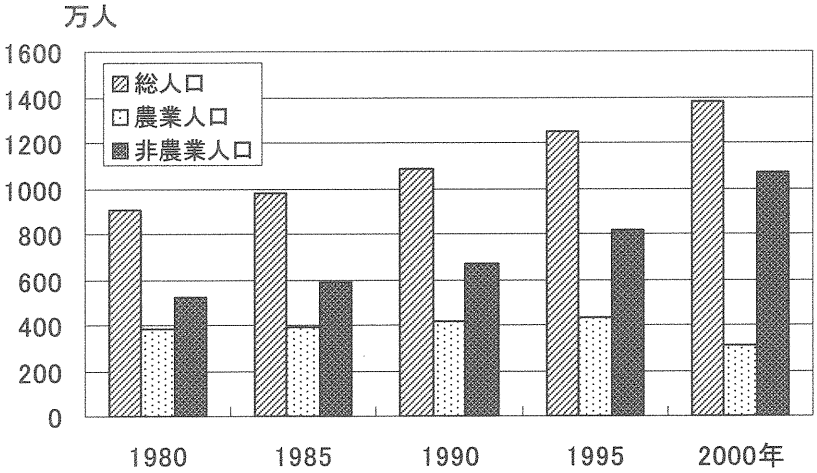
上海市と並んで中国の３直轄市の１つで，中国の政治，経済，文化の中心地である。北京市は，華北平野の北西端に位置し，東北，蒙古高原と華北を結ぶ交通の要衝に位置している。北京の地形は北西に高く，南東に低く，北部，西部は山地で囲まれ，渤海に向かって華北平原が広がる。西部の山地は太行山脈の一支脈である西山で，北部は燕山山脈に属する軍都山である。

北京市の市域は16,808平方kmと広大でわが国の四国にほぼ匹敵する面積を有するが，それらは地形により山地地域（62%）と平野地域（38%）に分けられる。北京市は16区，２県の行政区画から構成され，一方，都心から外方に向かって市街地域（東城・西城・崇文・宣武の４区），近郊地域（朝陽・豊台・石景山・海淀の４区），遠郊地域（門頭溝・房山・通州・大興・平谷・順義・昌平・懐柔の４区と密雲・延慶県の２県）に区分される（第１図参照）。

北京市の人口は第２次大戦以後一貫した増加を示しており，最近20年間をみても，1980年の904万人が2000年には1,382万人と1.5倍以上に急増している。この人口増加を農業人口と非農業人口に区別して見ると，この間の人口増加はほとんど非農業人口の増加によりもたらされていることが分かる（第２図）。2000年の国勢調査によれば，都市常住人口は77.6%，農村常住人口は22.4%となっている。人口分布で見ると，都市面積の１%に満たない市街地に総人口の15.6%，8%に満たない近郊地域に47.1%が居住しており，都市面積の90%を超える遠郊地域には都市全体の37%の人口しか居住していない。

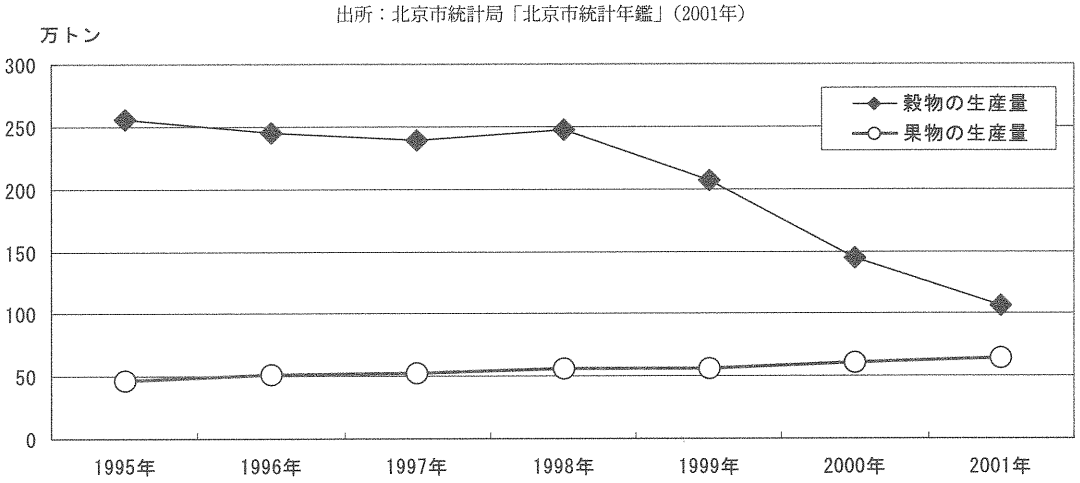
２．北京市の農業と果樹栽培の発展

北京市の農地面積は，建国後の1952年をピークとしてその後一貫して減少を示しているが，近年で特に減少が顕著な区は，朝陽区・海淀区・豊台区などの市街地域を取り囲む近郊地域である。農地減少の主要な原因は人口増加に伴う市街地の拡大である。市街地の拡大は農地を蚕食したが，その結果農業生産額が減少し



第２図　北京市における人口の推移

出所：北京市統計局「北京市統計年鑑」(2001年)



第３図　北京市における穀物・果物生産量の推移

注：北京市統計局「北京市統計年鑑」(1995～2001年) より作成

たのは穀物生産であって，逆に果物生産量は増加した。第３図は，北京市における最近の穀物と果物の生産量を示しているが，これより，穀物生産量の大幅な減少に対して果物生産量の一貫した増加傾向を読みとることができるであろう。このように，北京市において穀物生産が減少する中で果樹生産が増加した理由は主に２つ考えられる。第１は，中国政府が農家の所得向上を意図して果樹生産を奨励し，その推進に多額の助成金を投入したことである。第２は，市場経済の導入後に企業が利潤が見込める果樹栽培へ進出したことである。このような理由による北京市の果樹栽培の発展が，その後の観光農園発展の礎石となるのである。

農地の現状を，耕地と樹園地に分け区県別に見てみよう（第１表)。但し，市街地域の農地は極小であるので近郊地域と遠郊地域のみについて考察することにする。先ず，北京市全体で指摘できることは，北京市は果樹栽培の盛んな地域であるということで，ちなみに農地面積に占める樹園地面積の割合，すなわち樹園地率は22.4%と高い。これは，新鮮な果実を求める大都市の巨大なニーズが近くにあることに依るところが大きい。区県単位で見ると，平谷区，懐柔区，昌平区，大興区が樹園地面積が広大で，農地面積に占める樹園地面積の割合，すなわち樹園地率も大興区以外は高く，北京市を代表する果樹栽培地域であることが分かる。樹園地率のみを見ると石景山区や門頭溝区が高いが，樹園地面積は狭小なので北京市を代表する果樹栽培地域とは言い難い。

北京市の果樹種類別の樹園地面積を示したのが第２

第１表　北京市の区県別果樹栽培の現状

区県名	総面積	耕地面積	樹園地面積	樹園地％	果物の種類	主な果物
	(平方キロ)	(平方キロ)	(平方キロ)			
朝陽区	471	134.64	4.17	3.00	ナツメ、ナシ	ナツメ
豊台区	304	68.14	13.35	16.38	ナツメ，サクランボウ，アンズ，モモ，スモモ，ブドウ，ザクロ	ナツメ
石景山区	86	4.40	5.19	54.13		
海淀区	426	87.82	35.23	28.63	サクランボウ	サクランボウ
門頭溝区	1455	28.48	39.22	57.93	リンゴ，アンズ，ナシ，カキ，サクランボウ，クルミ，アンズ	リンゴ
房山区	2019	399.97	80.89	16.82	カキ，ナシ，モモ，クルミ，アンズ，リンゴ，ブドウ，アン仁，サクランボウ，クリ，スモモ，ナツメ	カキ
昌平区	1352	246.65	118.29	32.41	リンゴ，モモ，ナシ，カキ，クリ	リンゴ
順義区	1016	512.65	47.57	8.49	ナシ，リンゴ，ブドウ，モモ，ナツメ，スモモ，サクランボウ	ナシ
通州区	912	511.07	34.22	6.28	モモ，ブドウ，ナシ，リンゴ，サクランボウ	モモ
大興区	1031	527.86	115.27	17.92	スイカ，ナシ	スイカ
平谷区	1075	191.00	172.94	47.52	モモ，ナシ，カキ，アンズ，ナツメ，リンゴ	モモ
懐柔区	2128	155.08	142.43	47.87	クリ，アン仁，ナシ，	クリ
密云県	2226	241.46	104.58	30.22	クリ，アン仁，リンゴ，ナシ，クルミ	クリ
延慶県	2000	330.02	79.87	19.48	クリ，アン仁，ブドウ，ナシ，スモモ，モモ，アンズ，リンゴ	クリ

注：北京市林業局（2002年），北京市統計局の「北京市統計年鑑」（2002年）より作成

表である。これによると，北京市の代表的な果樹は，栗，リンゴ，桃であり，これに続くのが梨，柿などであることが分かる。これらの果樹は，北京市全体で均等に生産されているのではなく，それぞれの地域の土壌，気候その他の条件に適応させて多様な果樹が栽培されている。第１表には，区県別で生産される果樹となかでも代表的な果樹を示している。特徴的な区県について見ると，果樹栽培の盛んな平谷区は桃の生産で全国第１位であり，年間の生産量は約12万トンである。この地域の果樹栽培は独立後に開始されたものでその歴史は浅いが，2000年には国家林業局と国家農業部から，それぞれ「全国経済林桃の郷」，「中国優質桃基地」の表彰を受けるまでの生産地となった。密雲県は栗の一大産地で栗の観光農園も多く，これらはこの地域の山岳観光地とセットとして開発されたものも多い。大興区のスイカは全国的に有名であり，またこの地域は梨の品種改良にも熱心で，2000年には日本の優良梨品種の導入も試みられている。

第２表　北京市の種類別樹園地面積

種　類	面　積
	(万ヘクタール)
クリ	2.67
リンゴ	2.2
モモ	2
ナシ	1.1
カキ	1.1
アンニン	1.1
その他	1.4

出所：北京市林業局（1999年）より作成

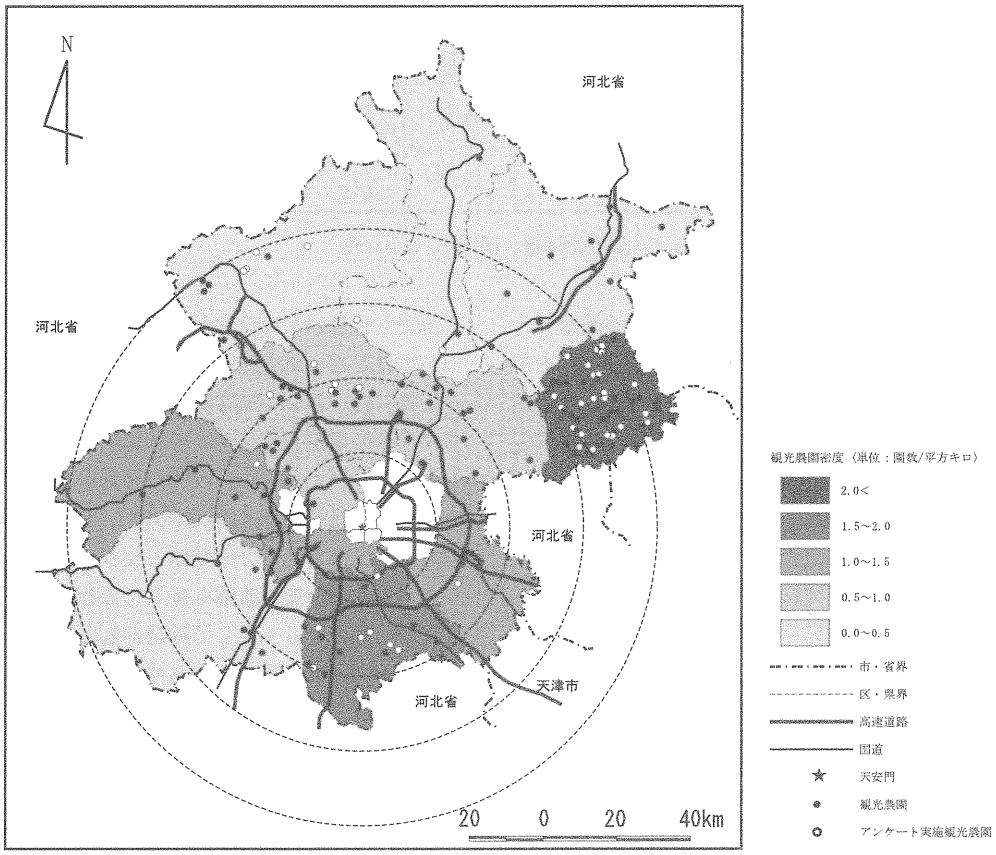
Ⅲ　北京市における観光農園の展開と分布

中国における最初の観光農園は1980年代後期に広東省で誕生した（郭煥成，2002）。北京市における最初

の観光農園（最初は果樹採取園と称した）は，ほぼ同じ時期に昌平区の十三陵という観光地に併設する形で設置された。入園者自らが果実を採取するこの新方式は観光客の熱烈な支持を獲得し，その後1990年代に入ると，観光地と周辺の果樹園とが相互に協力する形で新たに観光農園が形成されていった。2000年に入ると，中国政府の援助のもとに，従来の観光農園の概念を越えた大規模な施設が建設されるようになった。これらの施設は，観光客が自ら果実の採取をする点では観光農園の範疇に入るが，これ以外に農業生産技術の開発・普及も施設の重要な役割であり，後者の役割が前者より大幅に卓越している場合が多い。

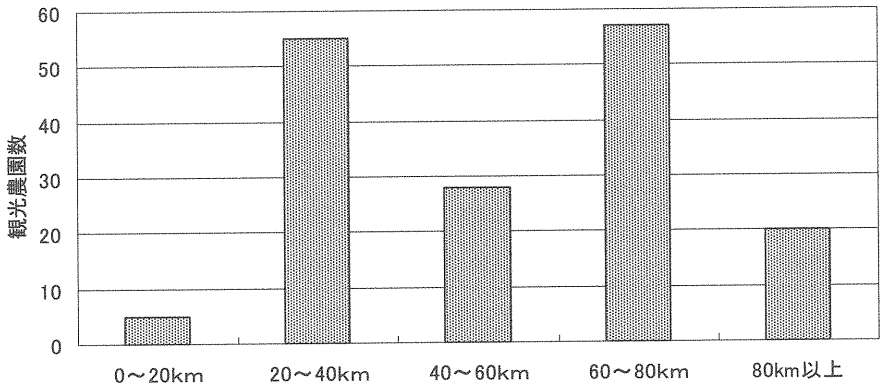
北京市の観光農園の分布に着目してみよう。第４図は北京市林業局果樹産業所が2003年に発行した『北京市旅遊観光果園大観』に掲載されている165ヶ所の観光農園の所在地を示したものであるが，分布特性について若干の考察をしてみよう。先ず，地域区分別に見ると，市街地域は観光農園は皆無であり，近郊地域では海淀区以外ではわずかの立地を見るのみであり，大多数が遠郊地域に立地している。このことから，農園数と距離との間には反比例の関係が予測されるので，都心（天安門）から20km毎の距離帯別の農園数を調査した（第５図）。厳密には距離帯毎の面積を考慮しなければならないが，それをするまでもなく，都心からの距離と農園数との間には有意な反比例の関係は見られない。地域区分別の考察との間の違いは，近郊地域に分類される区県でも，都心からの距離が遠郊地域よりも遠い区県が存在する地域区分の仕方に起因していると考えられる。いずれにしても，交通利便性の視点から予測される農園数と距離との間の反比例の関係が見られないので，北京市の観光農園の分布は距離以外の要因に規定されていると考えられる。

次に，区県別の観光農園の分布，すなわち観光農園密度（観光農園数／土地面積）を見てみよう（前掲第



第４図　北京市における観光農園の分布

注：アンケート調査より作成
　　同心円は天安門から20キロ毎の距離を示す



第５図　都心からの距離帯別観光農園数

４図参照)。図から明らかなように，区県により農園密度に大きな差異がある。農園密度が最も高いのは平谷区であるが，ここは桃の郷としてのブランドイメージを活かして，政府の援助と個人農家の努力により北京で最大の観光農園地になったものである。農園密度は5.4園/km²と極めて高いが，個人経営の農園が卓越していることも一因である。高速道路や国道の整備による都心からの時間距離の短縮，地元の村役場の村内道路の整備，これに伴う都心からの直通バスの運行，なども観光農園化を推進した要因である。都心南部の大興区は，もともと砂地を利用したスイカの有名な産地であり，都心からの距離が近いこと，鉄道も高速道路も整備されているという交通の利便性を活かして観光農園化した地域である。昌平区の農園密度もかなり高いが，この地域には万里の長城や十三陵などの著名な観光地があり，これとの隣接による相乗効果を意図して作られた観光農園が多い。なお，密雲区は農園密度こそ低いが，極めて大規模な観光農園が政府の援助により密雲ダム湖の周辺に設立されており，規模を考慮すればこの区も観光農園が盛んな地域ということができよう。

Ⅳ　北京市の観光農園の成立要件

北京市における観光農園の展開と分布を見てきたが，ここで観光農園の成立要件について考察してみよう。前章までの考察，ならびに既往の研究（藤井：1972，溝尾：1994），各種の観光農園に関する資料，現地での調査を総合すると，北京市での観光農園の成立を可能とする要件として以下の８つを指摘できる。

①政府の農業支援政策の強化
②自由主義経済の導入
③都市化の進展
④所得の増加
⑤余暇時間の増加
⑥都市・農村所得格差解消への農業者の対応
⑦都市住民の新鮮な果物への嗜好の向上
⑧都心からの交通アクセスの変化

以下，これらについて個別に考察することにする。

先ず，政府の農業支援政策の強化であるが，中国は自由主義経済を導入しつつあるとはいえ基本的には計画経済であるので，政府の政策方針があらゆる分野に大きな影響を与える。北京市における急激な観光農園の展開も政府の新しい農業政策に依るところが大きい。中国の農業に関する第９次５カ年計画（1996～2000年）では「農産物の流通システムを整備する」，「農民の収入を増加させる」が主要な目的とされ，その具体化策の一つとして観光農園への助成が強化された。これに呼応して，北京市でも1998年から2010年を３段階に区分した観光農園の整備計画を立案し，その実現を図っている。供給側のみでなく需要側に関連した施策も採られている。1998年には全国町村旅行計画を策定し農村への旅行を促進する政策が採られ，また2004年には国家観光局の観光業のテーマとして「中国ふれあいの旅」を掲げ，農村への旅行が奨励された（第３表)。

政府のこのような政策も，観光農園が成立する社会的・経済的条件が北京市において醸成されていなければ画餅に期すことは必定で，逆に言えば，このような条件が整備されてきたと判断されたから各種の奨励策が導入されたと見るべきであろう。残りの７つの要因はこの基本的条件に関するものである。

農業への自由主義経済の導入は，農業者の間により

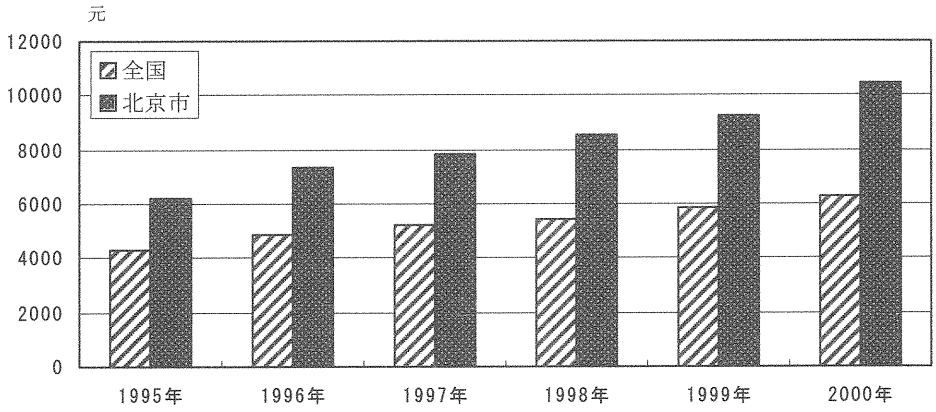
第3表　中国における主要観光プロジェクト

年代	テーマ	主旨
1992年	友好観光年	旅行を通じた親睦の強化
1993年	中国山水風光遊	有名な山河をめぐる美しい国土の快適な旅の促進
1994年	文物古跡遊	文物古跡の保護と観光の発展の促進
1995年	民俗風情遊	中国の56民族の文化理解と探訪
1996年	休暇リゾート遊	新しい休暇の過ごし方を提唱
1997年	中国旅行年	全国的な旅行の推進
1998年	全国町村旅行計画	改革開放の二十年以来の新たな農村生活の探訪
1999年	生態環境遊	環境の生態系を重視した旅行の促進
2000年	神州世紀遊	新世紀を契機とする旅行の推進
2001年	中国体育健身遊	健康保持のためのスポーツの奨励
2002年	中国民間芸術遊	中国民間芸術探訪
2004年	中国ふれあいの旅	都市・農村交流の促進

注：中国国家観光局資料より作成

利潤の高い農産物生産への意欲を醸成させ，すでに見たように，穀物生産量が大幅な減少を示す中でより高い利潤が見込まれる果樹生産量の増加をもたらせた。すでに指摘したが，このことが観光農園開業のベースとなっている。北京市において急激な都市化が進展していることはすでに指摘したが，この都市化は都市住民の土や自然に接する機会を減少させ，その結果，自然の中でレクリエーションを求めるニーズを生じさせ，観光農園はこのニーズに応える施設の一つとなった。

レクリエーションの対象としての観光農園に対するニーズがあったとしても，その活動を保証する所得が不充分であればニーズは顕在化されない。第6図は，北京市の労働者の年間所得の近年の変化を示すが，1995年の6238元がわずか5年後の2000年には10416元と1.67倍に急増しており，この所得の急増が観光農園のニーズを高めた一因と考えられる。所得が増大してもレクリエーションをする時間的余裕がなければ，これまたニーズは顕在化されない。中国においては，1995年5月1日から週休2日制が施行され，この前年には中国人民共和国労働法が改正され，その第45条で

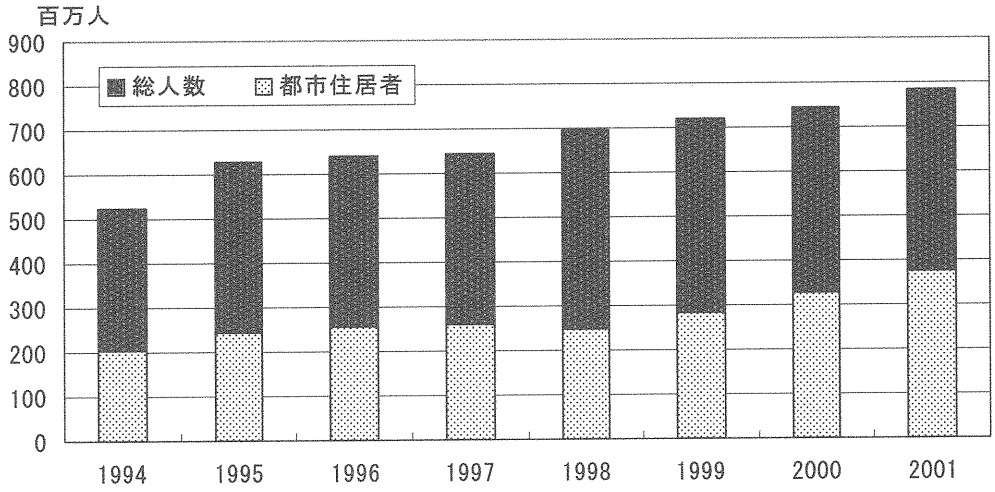


第6図　中国および北京市における労働者の年間所得（1995～2000年）
注：中国国家統計局「中国統計年鑑」(2001年）より作成

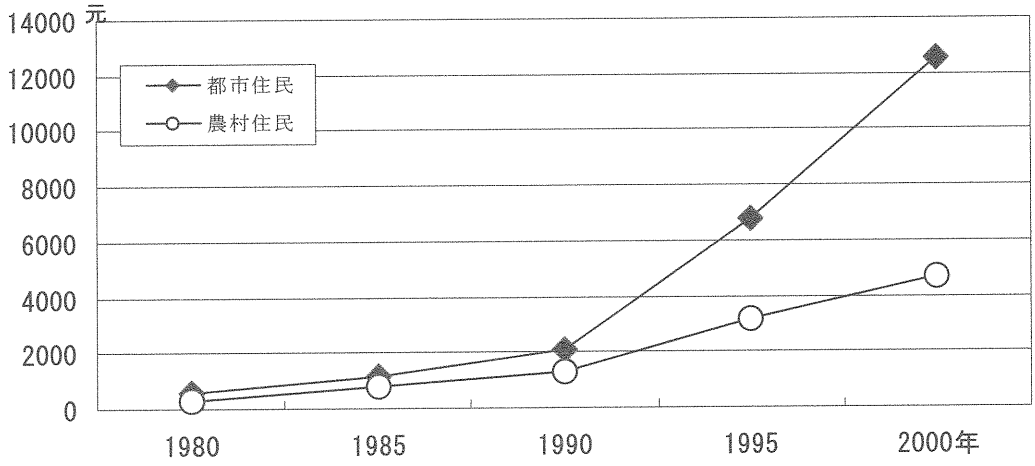
1年間以上労働に従事した者に対する有給休暇の権利が認められた。このような所得や余暇時間の増加により国内旅行の観光客数は急増し，第7図に示すように，1994年から2001年の間に1.5倍となった。

農業者が自由主義経済の導入後により高い利潤を求めて果樹栽培，さらには観光農園を指向したことはすでに述べたが，彼らをこのような行動に駆り立てた今ひとつの要因は，都市と農村間の所得格差の拡大である（第8図）。1980年には両者の所得差は291.3元であったものが，その後格差は一貫して拡大し，2000年には7873.3元までになり，農村住民の所得は都市住民のわずか3分の1程度となった。所得以外に，都市住民は医療・社会保障などの点で農村住民より高いサービスの提供の享受が一般に可能であるので，農村住民が意識している格差はこの数値以上であると推察される。生活水準の向上は，一般に人々の果実への嗜好を高め，さらにはより新鮮な果実への嗜好を高める傾向がある。指摘するまでもなく，究極の新鮮さは採果時であり，このニーズに対応するのが観光農園である。

観光農園へのアクセス条件の改善も観光農園成立のための重要な要因である。すでに見たように，北京市においては観光農園の多くが都心から離れた遠郊地域に立地しているが，交通体系とりわけ道路交通体系の整備により，これら地域が溝尾（1994）の指摘する「大都市圏からの日帰り圏」に入ってきたことが立地の原因の一つである。前掲の第4図には高速道路と国



第7図　中国における国内旅行の観光客数（1994～2001年）
注：2002年北京市統計局「北京市統計年鑑」より作成



第8図　北京市の都市・農村住民の年間所得の推移
注：2001年中国国家統計局「中国統計年鑑」より作成

道の路線を示すが，高速道路は都心から放射状に延びる路線と環状路線とから構成されているが，これらの多くは近年に開通したものである。ちなみに，北京市の高速道路は1988～2000年の間にはわずか100kmの開通であったが，2002年末までには開通区間は463kmへと増加し，2005年末には630kmとなる予定である。一般道路の伸びを見ると，1995～2001年の6年間に総延長は17.6%増加して13,891kmとなった（第9図）。北京市住民の多くはバスを利用して観光農園を訪問する場合が多いが，そのバス車両台数の変化を見ると，同じ6年間に3.18倍に急増している。もちろん，観光農園への訪問客の増加が直接の原因ではないが，バス路線網の充実により北京市民の観光農園へのアクセス条件が飛躍的に向上したことは間違いない。

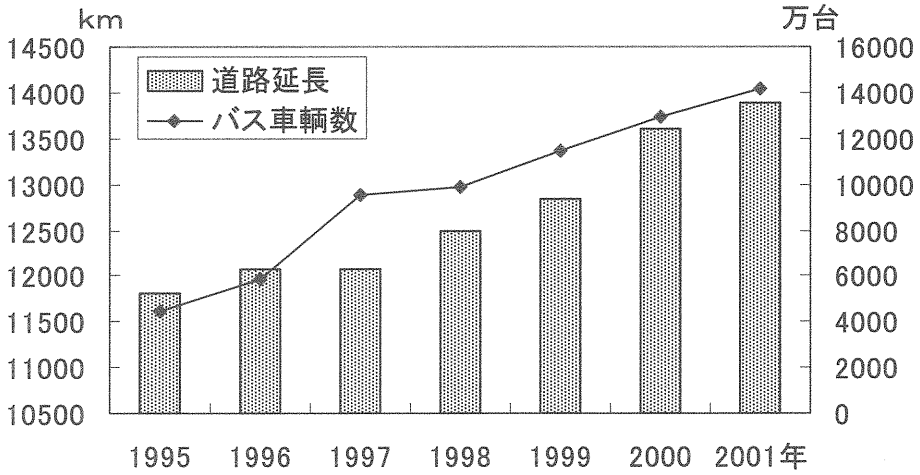
V　アンケート調査からみた北京市観光農園の特性

北京市の観光農園の特性を明らかにするため，2003年10月に，北京市林業局に登録されている165の観光農園全てに対してアンケート用紙を郵送し，59農園から回答を得た。第4表は59農園の特性を示したものであるが，以下ではこの表を中心にして北京市観光農園の特性について考察する。

先ず，開園時期についてみると，最も古い農園が1994年であるので，すでに見たように北京市における観光農園の歴史は，わが国と比較して極めて浅いと言うことができる。1998年を契機として急増しているが，この年はすでに見たように，中国政府が「全国町村旅行計画」を策定し農村地域への旅行を奨励した年である（前掲第3表参照）。また1998年から2003年までに開設された観光農園数は48で全体の86%をも占めるが，この期間は既述したごとく，北京市の観光農園整備計画の第1と第2段階に相当している。このことから，北京市における観光農園の多くは，政府ないしは北京市の計画に基づき整備されたものであることが分かる。

経営形態を見ると，個人経営が過半数を占めるが，組合経営，公営（国営，鎮営，村営）も多く，大半が個人経営の日本とは大きく異なっている。これは，中国政府や北京市が重要な農業振興策の一つとして観光農園の整備を掲げ，個人や組合経営に対する助成措置の他に，公営の施設を自らが設置して観光農園の整備を図っているからである。

農園面積についてみると，最小の10アールから最大の66,670アールまで極めて大きな差異がある。経営形態別の差異を見るため，それぞれの平均農園面積を求めたが，組合経営（7993アール）が最大で，以下，国営（5856アール），個人経営（3200アール）と続き，鎮営，村営，合資会社経営はいずれも2000アール以下であった。当初，個人経営の農園面積が最も狭いことを想定したが，結果は異なっていた。この原因は，個人経営の範疇の中に家族経営と個人企業経営が混在していることで，後者の存在により平均農園面積が高くなったことである。経営形態の性質から見てこれらは本来区別して考察される必要がある。



第9図　北京市における道路延長とバス車両台数の推移
注：北京市統計局2001年「北京市統計年鑑」より作成

第４表　北京市における経営類型別みた観光農園の経営状態

農　園	地　区	開園年	果物の種類	従業員数	農園面積（アール）	経営形態	経営者の前職業	政府の援助 有　○ 無　●	入園料 有料○ 無料●	観光期間（ヶ月）
安定鎮後安定村梨園	大興区	2001年	ナシ	8	200	○	農業，養殖，運輸	○	-	2
上営桃園	平谷区	1998年	モモ	5	47	○	医者	○	●	4
熊爾寨桃園	平谷区	1996年	モモ	2	10	○	農業	●	●	4
張家湾鎮上馬頭村果園	通州区	2000年	ブドウ	2	33	○	農業	○	●	3
熊爾寨杏園	平谷区	1998年	アンニン		67	○	商業	●	●	3
唐庄子桃観光農園	平谷区	1998年	モモ	7	800	○	養殖業	○	●	4
北京怡心園園芸有限公司	大興区	2000年	ナシ	38	667	○	軍人	○	○	2
北臧村鎮八家村梨園	大興区	2002年	ナシ	15	533	○	野菜の栽培	●	○	2
北臧村鎮豊水梨示範園	大興区	2001年	ナシ	5	333	○	内装、養殖	○	●	2
甘営大棗園	平谷区	1998年	ナツメ	4	333	○	建築業	○	●	2
楊庄戸設施桃園	平谷区	2002年	モモ	100	467	○	農業	○	●	2
大興区千畝精品梨園	大興区	2001年	ナシ	60	1333	○	林業	○	○	2
后沙峪新城大富農葡萄観光園	順義区	不明	ブドウ	20	1333	○	飲食業	●	●	5
中日友好観光采摘園	昌平区	1998年	リンゴ	30	1533	○		●	●	3
東高村葡萄園	平谷区	2001年	ブドウ	150	2000	○	村役場幹部	○	●	2
張家湾鎮牌楼営村果園	通州区	1995年	ブドウ	175	7107	○	工業	●	●	4
聶各庄文化観光采摘園	海淀区	1996年	アンズ		20001	○	栽培技術員	○	●	4
李家峪李園	平谷区	2001年	スモモ	150	13334	○		○	●	5
興隆庄果園	平谷区	2003年	モモ	200	6667	○	農業	○	●	7
陳太務桃園	平谷区	2000年	モモ	200	13334	○	幹部	○	●	3
辛庄堡杏園	延慶県	1997年	アンニン	200	20001	○	果樹の管理	○	○	2
黄村鎮千畝大桃基地	大興区	不明	モモ	2	33	●	不明	●	●	5
北四嶺桃園	平谷区	2000年	モモ	2	27	●	農業、建築業	●	●	4
熊爾寨胡桃園	平谷区	2002年	クルミ	3	13	●	村役場幹部	○	●	1
王各庄千畝大桃基地	大興区	1998年	モモ	3	67	●	農業	●	●	5
崔庄子設施園	平谷区	2000年	モモ	13	333	●	養殖業	○	●	2
東鹿角設施桃園	平谷区	2001年	モモ	600	2000	●	野菜栽培	○	●	2
井峪柿園	平谷区	1994年	カキ	3	13334	●	果樹栽培業	○	●	1
鎮羅営梨園	平谷区	2001年	ナシ	1800	5334	●	農業	●	●	2
安定鎮千畝古桑園	大興区	2003年	クワの実	20	2333	△	政府部門	○	○	2
海淀区北安河桜ん坊園	海淀区	1999年	サクランボウ	20	800	▲	果樹栽培	○	●	2
夏各庄果園	平谷区	不明	リンゴ	12	333	▲		●	-	2
紅泥溝林檎果園	昌平区	1999年	リンゴ	13	667	▲	農業	○	●	3
香堂果園	昌平区	1998年	5	4	200	○	農業	○	●	7
張山営果園	延慶県	2000年	2	4	33	○	果樹栽培	○	●	2
水峪大棗園	平谷区	1995年	2	5	67	○	果樹栽培	○	○	2
古北口旅遊観光采摘園	密云県	2002年	2	2	53	○	飲食業	○	●	5
陽光果園	延慶県	2002年	3	25	667	○	建築業	○	●	3
峨嵋山果園	平谷区	2000年	2	15	333	○	退職	○	●	4
北京峰谷林果技術中心	昌平区	2002年	6	10	733	○	無職	○	-	6
北京市金果樹果業科技中心	昌平区	2001年	7	15	833	○	果樹栽培	●	●	6
万庄子経済溝果園	平谷区	1998年	7	20	3334	○	会社員	○	●	4
北京普藍特農業開発有限公司	順義区	2002年	5	40	2667	○	運輸業	○	●	3
泉水峪果園	平谷区	1998年	2	300	3334	○	経営者，役場幹部	○	○	6
新城子旅遊観光果園	密云県	2003年	3		33	●	果樹栽培	不明	●	5
韓庄鎮果園	平谷区	2000年	2	4	80	●	村役場幹部	●	●	4
万畝梨花庄園	大興区	2000年	3	12	66670	●	農業	○	●	2
靠山集果園	平谷区	2000年	2	4	0	●	農業	○	●	1
昌平区果樹研究所	昌平区	2003年	9	50	3334	△	果樹栽培	○	●	10
北京市種羊場千畝大棗基地	大興区	2000年	2	100	6667	△	役場、羊の養殖	○	○	2
北京国林林果技術開発中心	房山区	2002年	6	100	11094	△	農業技術員	○	●	5
燕北農庄	懐柔区	2000年	6		2667	▲	果樹栽培	○	●	6
三合庄果園	昌平区	2000年	8	80	400	▲	果樹栽培	○	●	7
苛蘿農夢園	門頭溝区	2002年	2	12	1800	▲	建築業	○	●	3
四季青双新観光采摘園	海淀区	1996年	3	34	1000	▲	果樹栽培	●	●	5
翠泉村趣園	門頭溝区	1998年	6	20	1333	▲	経営者	○	●	2
里炮林檎園	延慶県	2002年	2	10	7334	▲	観光業	○	●	1
甜歌采摘楽園	懐柔区	1999年	4	10	1333	□	運輸業	○	●	6
北京葡香南苑	通州区	1995年	2	89	1733	□	栽培業	○	●	5

注：①果物の種類の欄は１種類の場合はその果物名を，２種類以上の場合はその種類数を示す。
②経営形態の欄の記号の意味は以下の通りである。
○個人経営　●組合経営　△国営　▲公営（鎮，村）　□合資経営

観光農園の経営者の観光農園に関わる直前の職業を調査したところ，農業が最も多いのは当然として，これ以外にも多様な職業の人が観光農園に新たに関わるようになったことが判明した。公営の観光農園の場合には中国の行政システムから見て必ずしも農業者である必要はないと思われるが，個人経営の場合にも多様な職業の前身を持つ人が多いことは注目される。中国は土地が国有であるので，政府から借用の許可さえ得られれば，他の分野から農業に進出することは可能である。それゆえに，観光農園開園に必要な経済力があり，その将来性を見込む人が新たに経営に参加するのである。但し，中国ではごく最近まで基本的には農業国家であったので，ほとんどの人が何らかの形で農業に関わっており，全くの異分野からの進出と見るべきではないであろう。

観光農園経営における政府の資金援助の有無を見ると，56園中44園が何らかの形の援助を受けている。現地での聞き取り調査によると，基本的には全ての観光農園で政府の援助を望んでいるが，予算制約の関係で全体に援助が行き届いていないとのことであった。

入園料についてみると，59園中51園が無料であり，ほとんどの農園が有料のわが国とは大きく異なっている。わが国と同様に，来園者は園内で食べる量に制限はないので，北京の観光農園の収入は来園者の持ち帰り分の販売にのみ依存していることになる。この違いは，市民が観光農園に期待する役割において，両国で大きな違いがあることを示している。すなわち，日本ではレクリエーションが第一義的な目的であるのに対して，中国では新鮮な果実の購買・持ち帰りが第一義的な目的で，レクリエーションは付随的な目的であると言える。

来園者の来訪形態は個々の観光農園で異なるが，全体像を見るため，回答のあった観光農園の来訪形態の割合の単純平均を求めてみた。わが国では近年ではあまり見られない「会社団体」が38%と最も多く，会社ぐるみで観光農園を訪問するパターンが一般化していることが分かるが，この数値の解釈には注意が必要と思われる。なぜなら，既述したごとく，北京市の観光農園はレクリエーション機能の他に農業生産技術の開発・普及機能も併せ持ったものもあり，これら施設への訪問では研修として会社ぐるみが多いことが予測されるからである。このため，当然の結果として「個人・家族」が33%と少なくなっている。以上のことから，北京市における観光農園の来訪形態はわが国のそれとは大きな差異があると指摘してよいであろう。

観光農園開園の効果についてみると，59農園のうち48園（81%）が収入の増加と答えており，観光農園の所得増加効果が明らかである。この他には，29園が「労働量の減少」を，9園が「知名度の向上」を，7園が「雇用創出効果」を指摘している。この結果から，北京市における観光農園の立地は地域にかなりプラスの効果をもたらしていると言えるので，観光農園の展開が最近の現象であることを考えると，今後一層の立地が予想される。

年間の観光農園の来訪者数は，回答のあった49農園全体で792,530人，平均すると1園当たり16,174人である。正確な統計を持ち合わせないが，この数値はわが国の観光農園と比較してかなり高いと思われる。この原因について詳細に見ると，高い数値は特定の大規模な観光農園の来訪者数に因るものであることが分かった。ちなみに，年間来訪者数が10万人を超える農園は3園ある。

Ⅵ　北京市平谷区・大興区の観光農園

1．平谷区唐庄子施設観光農園

前章では，北京市全体の観光農園について考察したが，ここでは性質の異なる2つの観光農園，北京市平谷区と大興区の観光農園を取り上げ，実態調査の結果を基にして，より詳細にその特性を考察してみよう。

平谷区は，北京市の中心部から東北約70kmに位置し，総人口は40万人，総面積は1,075平方キロメートルである。平谷区には1.8万ヘクタールの果樹園があり，桃，梨，柿，サンザシ，リンゴ，栗，ナツメ，アンズなどを中心に年間で13万トンの果樹が栽培され，11年連続で北京市最大の果樹栽培地になっている。特に，大桃，紅杏，紅富士リンゴ，平谷栗は，国家商標局に登録された商標であり，中国農業部自然食品発展センターの公布する「自然食品証明書」を受けている。また平谷区は，中国における100大果樹栽培地域の一つになっている。平谷区の観光農園は，このような伝統的な果樹栽培地域をベースとして発展したもので，年間の観光農園への来訪者数は現在では400万人に達し，観光業の収入は2.5億元となっている。

今回調査した観光農園の「唐庄子施設桃園」は，平谷区の管轄村である唐庄子村（世帯数：255世帯，人

口：806人）に立地している観光農園であり，経営形態は個人経営で，両親と20代の娘，それに北京市外から住み込みで雇用された４人（男性３人，女性１人）の合計７人で運営されている。主人は顧客獲得のための営業を兼務しており，娘は農園の会計とパソコン処理を担当している。雇用労働者の月給は宿舎と食事付で300～400元である。

この地区は，以前には養鶏が中心であったが，その後は桃栽培に転換し，1994年には温室栽培も開始され，現在では57の施設で温室栽培が行われている。唐庄子施設桃園の総面積は8ha，そのうち温室面積は4haである。この桃園は，当初は普通の果樹栽培園として作られたが，新鮮な果樹を求めての度重なる都市住民の来訪を契機として，収入増を意図して観光農園への転換を図ったもので，1998年に100万元の資金を投入して唐庄子村で最初の観光農園となった。この観光農園の開設にあたっては，農園へのアクセス道路の整備に政府から工事費の約７割の７万元の助成を受けている。この農家の収入は全て桃生産から得ているが，そのうち観光農園収入は20%を占めている。

第10図はこの観光農園の農業カレンダーを示したものである。図から明らかなように，温室栽培を取り入れることにより，労働量を年間を通じてほぼ均等に配分することが可能となっている。すなわち，温室栽培と露地栽培の桃狩りは，ほぼ半年離れた４月中旬～５月末と９～10月に行われ，，この間に整枝・剪定，摘蕾，摘果，袋掛け，そして温室の管理作業が行われる。労働者を雇用する場合に，必要労働力の年間を通しての不均衡は大きな問題であるが，この桃園ではこの問題を温室栽培を導入することにより解決している。

唐庄子村における観光農園の成功に刺激されて，隣接する白各庄村では，村役場が主導して政府から資金援助を得ながら大規模かつ近代的な観光農園を建設し，その経営を希望者に委ねる施策を実施した。2003年３月に我々が調査に訪れた際には，29の観光農園が整備され希望者に貸与された直後であった。借用料は年間２万元であるが，希望者が多く貸与者は抽選で決定された。現在，さらに40農園が建設中である。

２．大興区万畝梨花荘園

大興区は北京市の中心市街地から南方約20kmに位置し，総面積は1,039平方キロメートル，総人口は67万人である。北京市中心市街地とは京開高速道路で結ばれており，さらには10数本の郊外バス路線が市街地から大興区に通じている。地形は平原地帯なので平坦で，名所旧跡は少なく，観光資源は乏しい。

万畝梨花荘園は，梨花村を中心とする５つの村にまたがる組合方式の大規模な観光農園の総称であり，梨花村に立地する管理事務所も兼ねた中心観光施設と周辺の個人農家が所有する果樹もぎ取り園とで構成されており，農園面積は25平方kmにおよぶ。1999年に開業し，管理事務所兼中心観光施設では20名が雇用されている。

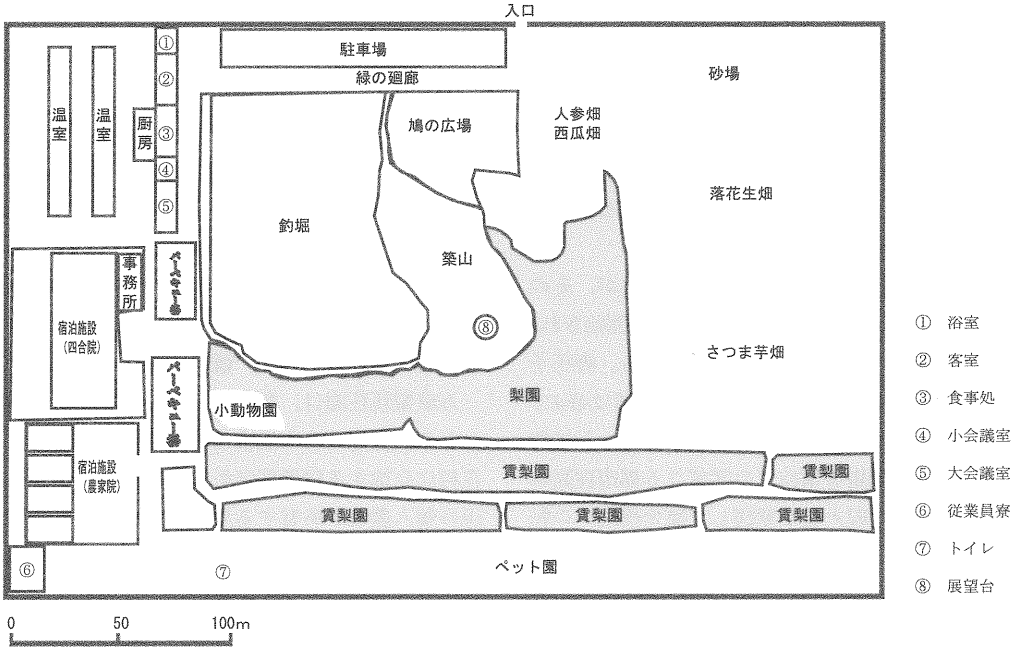
この荘園の経営の特徴は，かつては個人経営であった小規模農園を万畝梨花荘園の名の下に統合し，この荘園が来訪者の管理を一括して行い，果樹もぎ取り希望の来訪者を傘下の個人農家に配分する方式を採用していることである。入場料金は12元に設定し，10元を農家の収入とし，残り２元を荘園の収入としている。

第11図は荘園の管理事務所兼中心観光施設を示すが，事務所，果樹園の他に，釣り堀，レストラン，バーベキュー施設などがあり，さらには大小の会議室がある。中国の観光農園はレクリエーション機能の他に農業生産技術の開発・普及機能を併せ持つ場合があることはすでに指摘したが，この荘園はまさにその範疇に入る施設であり，大小の会議室はこのために設置されている。この他に，日本の観光農園ではほとんど見られない施設としては，世界の犬を集めたペット園，鴨や小型の馬がいるミニ動物園，宿泊施設などがある。経営者によれば，この荘園の経営方針は“幼児から老人まであらゆる階層の人に，いついかなる季節でも楽しん

季節	1月	2月	3月	4月			5月	6月			7月			8月	9月	10月	11月	12月
				初旬	中旬	下旬		初旬	中旬	下旬	初旬	中旬	下旬					
温室	温室の管理				温室モモ狩り							整枝・剪定						温室の管理
露地					摘蕾			摘果		袋掛け					露地モモ狩り		秋季の剪定	
	年間消毒10回くらい																	

第10図　北京市平谷区唐庄子施設観光農園の農業カレンダー

注：2003年８月，聞き取り調査より作成



第11図　北京市大興区万畝梨花荘園の施設配置図

でもらえる施設の整備”であり，例えば，春は梨の花祭り，夏は梨の収穫，秋はサツマイモ，冬は旧正月などの民族習慣などの催し等，その季節に応じた企画を実施している。

荘園の客層は中学生および職場関係の団体が中心であり，荘園は88社の旅行会社と長期契約を結び来訪者の確保に努めている。筆者らが現地調査を実施した日（2003年9月10日）の来訪者数は700名余であり，そのほとんどが北京市内の中学生であった。この中学校は，毎年9月に全生徒を大型バスでこの施設に連れてきて，生徒に農作業を体験学習させている。生徒達は果物をもぎ取り，荘園から配布されたナイロン袋にもぎ取った果実を入れて，それを全て学校に持ち帰る。わが国ではこのような観光農園を活用した農作業の体験学習はあまり見られないが，中国においてはこのようなシステムが広く一般化されている。ちなみに，この荘園では数カ所の学校と同じような契約を結んでいる。

以上の万畝梨花荘園の実態から明らかなように，中国の観光農園，特に大規模なそれは，日本のような果樹のもぎ取りのみに特化した施設ではなく，それ以外のレクリエーション施設も多数整備され，さらには生徒の学習施設や農業生産技術の開発・普及のための機能を併せ持ったものも少なくない。これは，唐庄子施設桃園のようなもぎ取りのみの観光農園と好対照をなしており，それゆえ，北京市の観光農園は2極分化されていると言えよう。

Ⅶ　おわりに

本研究では，中国の中でも最も観光農園が発達している北京市を取り上げ，その展開と空間的分布特性を明らかにするとともに，その成立要件について考察した。さらには，北京市に立地する観光農園に対するアンケート調査から観光農園の特性を明らかにし，最後には，性質が異なる2つの観光農園を取り上げ，より詳細にその特性を考察するとともに，北京市における観光農園の2極分化の実態などを明らかにしてきた。その結果，以下のような諸点が明らかとなった。

1）北京市では，穀物生産が減少する中で果樹生産が増加したが，これは，中国政府の農家所得向上施策として果樹生産に助成金を交付したこと，さらには，市場経済の導入により利潤が見込める果樹栽培に企業が進出したことによる。このような果樹生産の発展がその後の観光農園の礎石となっている。

2）北京市における最初の観光農園は，1980年代後期に昌平区の十三陵という観光地に併設する形で設置された。この例に見るように，初期の観光農

園は観光地に隣接して立地された場合が多い。

3）北京市の観光農園の分布は都心からの距離と有意な相関がなく，距離以外の要因によりその立地が規定されていると思われる。

4）北京市の観光農園の成立を可能とする主な要件は以下の8つである。

①政府の農業支援政策の強化
②自由主義経済の導入
③都市化の進展
④所得の増加
⑤余暇時間の増加
⑥都市・農村所得格差解消への農業者の対応
⑦都市住民の新鮮な果物への嗜好の向上
⑧都心からの交通アクセスの変化

5）中国は計画経済体制であるので，観光農園の立地も政府や北京市の政策に大きく規定されている。近年における観光農園の急増は，政府の農業所得向上政策によるところが大きい。

6）北京市の観光農園の経営形態は，個人経営の他に，組合経営，公営（国営，鎮営，村営）も多く，大半が個人経営の日本とは大きく異なっている。これは，中国政府や北京市が重要な農業振興策の一つとして観光農園の整備を掲げ，個人や組合経営に対する助成措置の他に，公営の施設を自らが設置して観光農園の整備を図っているからである。

7）観光農園の経営者の観光農園に関わる直前の職業を調査したところ，農業以外にも多様な分野から進出していることが判明した。これは，中国は土地が国有であるので，政府から借用の許可を取得すれば，容易に他分野からの進出が可能であるからである。但し，中国ではごく最近まで基本的に農業国家で，ほとんどの人が何らかの形で農業に関わっているので，これを全くの異分野からの進出と見るべきではない。

8）北京市における観光農園の多くは入園料が無料で，収入の大半は来園者の持ち帰り分の販売に依存している。これはわが国の観光農園と大きく異なるが，日本ではレクリエーションが第一義的な目的であるのに対して，中国では新鮮な果実の購買・持ち帰りが第一義的な目的で，レクリエーションは付随的な目的であるためである。

9）北京市の観光農園の来訪者は「会社団体」が最も多く，わが国のように個人客が卓越していない。中国では，観光農園の機能として，レクリエーション以外に農業生産技術の開発・普及機能を併せ持つため，これら施設へ会社ぐるみで研修で訪問する場合が多いからである。

10）中国においては，万畝梨花荘園のように，公的機関が管理事務所兼中心観光施設を設置し，周辺の個人農家がこれに参加して観光農園地域を形成する場合があるが，このようなシステムはわが国では皆無である。

（付記）

本研究を進めるにあたり，現地調査や資料収集において，北京林業大学安玉和教授，北京市農科院郭煥成教授，北京市統計局果樹研究所王氏に多大なお世話になった。また，北京市の観光農園のアンケート調査においては59園の経営者の方のご協力を頂いた。末筆ながら厚くお礼申し上げます。

参考文献

河原典史（1996）：京都府における観光レクリエーション型農業－八幡市の観光農園を中心に－京都地域研究，11，64-75

小池晶子（2002）：茨城県千代田における観光行動からみた観光農園の展開．茨城地理，3，1-17

田辺一彦（1988）：観光農園についての若干の考察－兵庫県氷上郡春日を事例として－．人文地理，40，59-71

藤井信雄（1972）：『観光農業への招待』富民協会，328p.

溝尾良隆（1994）：『観光を読む－地域振興への提言－』古今書院，206p.

山村順次（1993）：南房総千倉町白間津地区の花つみ園と観光客，地誌研究ノート，pp.1-3

盧雲亭・劉軍萍（1995）：『観光農業』中国農業科技出版社

郭煥成（2002）：観光休暇農業と郷村生態旅行

北京市林業局果樹産業所（2003）：『北京市旅遊観光果園大観』

北京市統計局（2001）：『北京市統計年鑑』